

松代藩文武学校

江戸時代、当時の武士や子供たちを教育するために、藩校と呼ばれる文学や武道を学ぶための学校が多く建てられました。17 世紀から 19 世紀にかけ、日本各地の大名たちはこうした藩校を 250 以上設立したのです。他の地域にもまだいくつかの藩校の建物が現存しますが、松代藩文武学校は江戸時代からの建物や敷地のほぼすべてが残っている唯一の藩校なのです。

成り立ち

1851 年、松代の 8 代目藩主である真田幸貫は松代藩文武学校の設立へ動き始めました。松代城付近の火災によって開校が少し遅れましたが、1855 年に 9 代目藩主の真田幸教のもとに学校が開校しました。生徒たちはそこで読み書きや様々な武術を学び、多くは 8 歳から通い始めました。

建物について

学校の正門に入り、中庭の向こう側には文学所があります。文学所は学校で最大の建物として、教室、台所、事務室、来客用の部屋を備えていました。後ろにある小さな建物は、教科書やその他の重要な本などを、火災などから守るために使用されていた倉庫です。

中庭の東と西にある建物も教室として使われていました。文学の授業と共に、西側の建物では、西洋医学と漢方医学の授業が行われました。

勉学の授業は畳の床の部屋で行われていましたが、剣術などの武術の授業は、大きな木の床の部屋で行われました。高くなった畳の床から、教員は生徒の稽古の様子を見ることができました。武器の使い方や軍事教練の教室は天井が大きく開いており、また当時の建築によく使われていた、むき出しの赤い松の梁と垂木が特徴です。

剣術所と柔術所

校門に入り、右手すぐにある剣術所は剣術の練習のために使用されていました。剣術は当時、とても重視され、1863 年には北側の東序との間に練習用のスペースを拡張しました。

柔術所は校門から左の奥にあり、生徒たちは柔術を練習していました。

槍術所

学校で最大の武道場である槍術所では、生徒は槍、後に銃の技術を学んでいました。この部屋は現在でも日本の武道の大会に使用されています。

弓術所

弓術所は、日本の「弓道」の稽古専用に使われていました。いくつかの点で槍術所と似ていますが、弓術所の西側の壁は開き、射場に通じています。生徒は建物の中から、外にある的を撃っていたのです。

松代藩文武学校の変化

江戸時代の終わりにかけて、外国の思想や技術の影響力が高まるにつれ、西洋の軍事学が松代藩文武学校のカリキュラムの多くを占めるようになりました。この変化に対応するため、主に生徒に軍事学と西洋の大砲の指導を行っていました。

1868 年の明治維新後、松代藩文武学校は 1960 年代に閉鎖されるまで、新しい政府の教育システムの下で学校として使用され続けました。そして 1978 年に、松代藩文武学校は史跡として一般公開されました。

松代藩文武学校は、1953 年に国の史跡に指定されました。